



日常生活支援あつづつ・たすけ愛ふくろう

代表 ^{さわでとみこ} 澤出桃姫子さん
(NPO法人ホームヘルパーノア 理事長)

「みんな一緒」は嫌い

1時間700円でお手伝い。いわゆる有償ボランティアで地域住民同士の助け合いを推進している「日常生活支援あつづつ・たすけ愛ふくろう」。この事業を実施するNPO法人「ホームヘルパーノア」の代表を務めるのが澤出桃姫子さん(71歳)です。澤出さんは遠軽町で生まれ、親戚一族が集まれば100人を超える大家族の中で育ちました。いろいろな人と関わる中で、人は皆同じではないことを自然に覚えました。「同じ匂いのする仲間」と、当時高校生では禁じられていた「仲間だけでの旅行」を決行するなど、大胆な若者だったといいます。「個性を尊重しながら、同じ理念やミッションを持った人たちと行動するのが好きでした。固定化された組織や十把一絡げの『みんな一緒』が嫌だったんです。」といたずらっぽい顔で笑います。

この時に培われた考え方は、今の活動にも貫かれています。「私たちの事業は人のケアをするためで、事業をするために人のケアをすることではありません。器(制度)に人を当てはめてはいけないということです。」と澤出さんはいいます。

「最期を家で迎えられるしくみ」をつくる

「最期は、家の畳の上で死にたい。」20年前、お母さんから聞かされた澤出さん。「自宅で最期を迎えたいと考える人はたくさんいるはず。家で死にたい人が最期まで家で過ごせるしくみをつくろう。」と決心しました。

その時一番必要だと感じたのが住民同士の助け合いです。「ホームヘルパーなどの公的なサービスだけでは、器に当てはめられてしまい、それぞれの人にふさわしいケアなどできるはずがない。」そうしてつくったのが、澤出さんが理想とする助け合いボランティアグループの「ノア」でした。

人の暮らしを支える力

～フォーマルとインフォーマルを考える～

人が日々の生活に何かの助けが必要となったとき、誰に何をしてもらえると安心して生活することができサービスをフォーマルサービスとすると、有償・無償サービスといえるでしょう。それぞれの特長を生かすために、2つの側面から考えてみました。

ところが、現実に活動を始めると困ったことが起こりました。ボランティアでは事務所の家賃や消耗品費などの運営費を捻出できないのです。このため、ボランティアの運営資金を稼ぐために、「ノア」は介護保険事業に参入し、その事業による利益でボランティア活動をするしくみをつくりました。それが「たすけ愛ふくろう」です。

1時間700円が地域という土台を築く

介護保険事業と助け合いボランティア、その両方を実践している澤出さんですが、「実は、ヘルパーとしての私とボランティアとしての私は、役割を変えます。」ヘルパーには、「相手の文化歴史を受け入れて、自分の価値観は持ち込まず、専門性に基づいてケアするプロ意識」、ボランティアには、「少し自分らしさを出して、対等のお付き合いをする中で相手の希望に応えること」が求められるといいます。

「決まった器、つまりケアに人を当てはめない」という考え方は共通していますが、より深く専門性を発揮するフォーマルに対し、信頼関係に基づいて人間性を出しながら支援するインフォーマル。ひとりの人を支えるとき、このフォーマルとインフォーマルを組み合わせることによって、地域での安心した暮らしを支援することができます。「有償の助け合いや近所同士の助け合いが多様に重なって、生活の土台である地域がつくられる。土台があるから、制度がしっかりとその役割を果たすことができる。」そんなイメージが澤出さんの理想です。

澤出さんのお母さんを思う気持ちから立ち上がったこのしくみも、いずれは誰かに引き継ぐ時が来ます。「少しさみしい気もしますが、気になりません。考え方を受け継いでもらって、少しずつ自分の色を抜いていくつもりです。」と澤出さん。人が社会で暮らす限り、そこには助け合いが必要になります。その先鞭をつけた澤出さん。偉大な功績に比べて控えめな笑顔が印象的です。



札幌市介護支援専門員連絡協議会厚別区支部

支部長 ^{よこやま なお} 横山 直さん
(コスモス介護センター管理者)

大好きだったおばあちゃんのために

ケアマネジャーになって15年。コスモス介護センター管理者の横山直さん(42歳)が介護・福祉の道を志したきっかけは、天塩町で過ごした高校時代に遡ります。天塩の実家では祖父母と同居していたという横山さん。小さい頃から大好きだった祖母が介護の必要な状態になりました。「おばあちゃんを介護したい」という思いから、資格がとれる札幌の専門学校に進学することを決めました。専門学校在学中に祖母は亡くなり夢は叶いませんでしたが、卒業後は介護福祉士として札幌で働くこととなりました。

当時は男性介護士が少なく、苦勞する場面も多かったのですが、介護の現場を経験した後、キャリアアップのためケアマネジャーの資格も取得。今では札幌市介護支援専門員連絡協議会(ケアマネ連協)厚別区支部長を務めます。

インフォーマルで柔軟な支援

高齢者の自立した生活を支援するため、日頃から介護保険サービスを調整するケアマネジャー。介護保険制度によるプロのサービス(フォーマル)と、地域住民同士の助け合い(インフォーマル)を、横山さんはどのように見ているのでしょうか。「介護保険サービスの調整と地域の助け合いの調整を同時に進めたとしたら、支援が入るまでの時間や確実性では前者の方が優れています。医療と介護の連携が進んできたことも、介護保険を使いやすいものにしています。」といいます。

それでは、制度による各種のサービスが充実する中、地域の助け合いに期待される役割は何でしょうか。この問いに横山さんは「ほかには代えられない柔軟性と安心感」と明言します。「ケアプランでは通常、その方の生活を1週間単位で見てもサービスを組み立てていきます。ですが、これだと、

今日急に大雪が降ったからゴミが出せないとか、今日は少し足が痛いから外出に不安があるといった場合、臨機応変に対応することは難しいです。地域の助け合いでは、支える人も支えられる人も、同じ地域の住民として同じ場所で同じ時間を過ごして生きています。さまざまなことを共有している住民同士だからこそ、お互い自分事のように感じて自然に最善のお手伝いがされるのではないのでしょうか。」

介護保険制度では「介護職員の高齢化や人員不足」が大きな課題です。限られたプロによる介護サービスが、それを真に必要としている人に行き届くようにするためにも、「日常生活上のちょっとしたことは、近所同士で支え合うことも大切」と横山さんはいいます。

地域と専門職を結び付けたい

高齢者の生活に大きな安心を与える地域の助け合い。しかしケアマネジャーが利用者のためにそれを提案するのは難しい側面もあるといいます。

その1つは、「住民同士の助け合いが進んでいる地域とそうでないところの格差が大きいことです。それらの情報をケアマネジャーが自分で把握するのは難しい。助け合い活動が一覧化されていたり、福まちや福祉推進委員会など、地域のコーディネーター役の人に相談できたりすると良いですね。」と生活支援体制整備事業に期待を込めます。

「近所とのお付き合いがないから、いざという時に地域の人に頼れないという方が少なくありません。日々動いている地域の活動とケアマネジャーとを何とか結びつけていきたいですね。次の1年が勝負だと思っています。」

横山さんは厚別区内のケアマネジャーを束ねるリーダーとして、明快にそして力強く結んでくださいました。